

〈書評〉

日高昭二編 お茶の水書房

『表象としての日本——移動と越境の文化学』

島村 輝 (フェリス女学院大学)

21世紀に入ってはや10年目に差し掛かった今日、前世紀を特徴づけた「戦争」と「革命」の歴史の底流にあったものがなんだったのかを問いなおす、新たな立脚点が生み出されつつあるような状況が生まれている。そうした中で、アメリカを中心においた「グローバリゼーション」への反省もあり、「地域」や「交通」の問題は、文化の面においてもとりわけ重要なテーマとなってきたといえよう。

本書はそうした状況の中で、ほかならぬ「日本」という表象を取り上げ、言語と歴史という、隣接する文化の側面から、その意味を検討しようとする、意欲的な試みの成果である。「移動と越境の文化学」という副題は、単にこれが「日本」として表象される地域からの超出という問題に関わるというばかりでなく、それを取り扱う方法上の面においても、専門分野やジャンルの境界を越えて、斬新な視点を見出すというところにあると理解することができる。

それにしても、編者による「はじめに」にも記されているように、こうした時代にあって「日本」というような地域「表象」を取り上げて検討するということは、それ自体として方法的に非常に冒険的な問題をはらんでいるといわなければならない。ひとたび「日本」という言葉を用い、その内容について語ろうとすれば、そこで用いられている「日本」という言葉の内容を充填しつつ、しかもそこで語られている「日本」を「表象」として相対化し、解体する作業を伴わざるを得ないからである。この困難な作業のために、本書では「日本」の文化や伝統を自明なものとする思考をいったん置き放ち、文化表象としての「日本」の歴史

的な文脈を掘り起こすところから始め」る、と語られる必要があったと思われる。対象としては「古代日本語における異国・異境の表象」の考察(第7章 前田禎彦)から、1960~70年代にかけてのイギリス人作家、アンジェラ・カーターの滞日経験を扱った「私を他者化する鏡」(第6章 村井まや子)まで、年代としては1941年生まれから1970年生まれまで、専門領域も世代も異なる研究者たちによって取り組まれたこの作業は、「表象」という問題系のもとに「ゆるやかなコンセプトを共有し」つつ「各自がそれぞれの手つきで対象についての思考を重ねる」という、まさに「思考しつつ解体する」必要に見合った手続きでまとめられたものといえるだろう。

本書の第I部は「越境する言語空間」と題され、主に言語表象の面からとらえられた「日本」について考察された論文が収められている。そこでは生き物としての「ヘイケガニ」が、日本文化に接した外国人たちにどのようにして「日本」を表象する「平家蟹」として位置づけられることになったか(第1章 鈴木彰)、あるいは、「忠臣蔵」というストーリーが外国人たちに紹介され、翻訳、翻案されていく過程で、たとえば「忠義」という概念がどのように理解され、表現されたか、それがまた日本に逆輸入されて受容されるにあたりどのような違和感を生み出したのか(第2章 日高昭二)といった、個別具体的な「表象」の分析が示される。

この第I部では、開国を機に新たに見出された文化的な場所(トポス)としての「日本」と、そこでの「女性」表象に考察を加えた「(蝶々夫人)物語とキリスト教」(第4章 鳥越輝昭)、さらに

多くの外国人表現者たちによって表象化された「日本女性」像の相対化を試みようとしたヨネ・ノグチの作を取り上げた「『マダム』パタフライをこえる試み」(第5章 山口ヨシ子)の2論文が、本書の複眼的な方法を典型的に示していて興味深い。前者ではピエール・ロティの小説『お菊さん』からジョン・ルーサー・ロングの小説『蝶々夫人』、ディヴィッド・ベラスコの戯曲化による『お蝶夫人』、プッチーニのオペラ『蝶々夫人』までを通時的に追ひ、そこにある変質の過程に「キリスト教圏でのわかりやすさ」という要素がはたらいたことを明らかにしている。一方後者は、そうした受容における、ある部分でステレオタイプ化した「日本女性」像に対する反発としての『アメリカ日記』を分析する。この両考察を対照してみると、結局のところ異質な文化に受容され、そこで表象される「日本」なるものは、それを受け入れる側の文化の枠組みによって作り上げられていくものであることが改めて実感される。そして実は「日本」人にとっても、近代「日本」国家成立にあたっては同様の事態が起っていたのではないかということが、新聞「日本」の第1号を読み解くことによって示唆されてもいるのではないだろうか(第3章 復本一郎)。

第Ⅱ部は「生成される歴史の場」というタイトルのもとに、4本の論文が収められている。17世紀末に日本を訪れたドイツ人・ケンペルの遺稿をもとに没後編纂・出版された『日本の歴史と記述』(1777~79年)がヨーロッパ思想界に与えた影響、とりわけカントの「永遠の平和のために」(1795年)への影響を論じた「ケンペル『日本誌』のインパクト」(第8章 井坂青司)、20世紀の日本と歩みをともにした英国人、ジョージ・サンソムの足跡を分析・紹介した「ジョージ・サンソムと日本」(第9章 岡嶋千幸)は、ともに歴史の中に埋もれがちな外国の日本への眼差しを、くっきりと際立たせてくれる。鎖国下にあっても、また明治維新後の「近代化」の過程にあっても、「日本」が常に「世界」との関係で表象されていたことが理解されるのである。最終章、幕末に欧米を興行した「広八一座」についてのモノグラフ(第10章 鈴木修一)は、「世界」に乗り出した「日

本」人の記録として、本書の掉尾から本書全体を逆照射する、興味深い読み物となっている。今後ともさらに分野を多様化して、このような試みが続けられることを期待したい。